

第 26 回（2014）年度小泉文夫音楽賞受賞記念講演

◆無断引用転載禁止◆

博物館に“命”を与える試み ～浜松市楽器博物館の20年～

浜松市楽器博物館館長 嶋和彦

東京 2015年5月21日

みなさん、こんにちは。浜松市楽器博物館館長の嶋と申します。この度は、名誉ある小泉文夫音楽賞を、「博物館という組織」にいただきまして、まことに有り難く、深く感謝申し上げます。

音楽賞の歴代の受賞者は、民族音楽学やその関係の分野での、素晴らしい研究業績、あるいは活動業績を残された方ばかりですし、当然のことながら現在でも、素晴らしい研究業績を生んでいらっしゃる方が、日本にも世界にも沢山いらっしゃいます。楽器博物館は、学問の世界で何か優れた論文を出したり、研究成果を出したということではありませんので、このような素晴らしい賞をいただくことに、いささか「うしろめたさと申し訳なさ」を感じているもの事実でございます。

昨年12月末に受賞者がホームページで静かに発表されましたが、その受賞理由に、「博物館の活動を通じて民族音楽学へ貢献した」と記載されておりました。民族音楽学は学問ですから、さて、楽器博物館は学問に貢献したのだろうか？ と自問せずにはいられませんでした。楽器博物館には、もちろん学芸員はおりますが、学者や研究者はおりません。仕事は平常の展示や特別展、演奏会、講座、ワークショップ、図録やCDの出版、所蔵コレクションの整理や修復などで手一杯の状況です。それらの活動をやめて研究論文や報告書を作ることに時間を割くことはなかなかできないのでした。毎日、博物館への入館者は全国からいらっしゃいますから、その方が、来てよかった、と感じてくださるような博物館を作るための作業が最優先でした。

開館当初も今も、その状況は変わりません。しかし、そのような状況でも博物館はなんとか20年を持ちこたえることができました。浜松市立の博物館ですから浜松市や運営を預かっている浜松市文化振興財団はもちろんのこと、今までの職員、アルバイト、励ましてくださった市民や全国の多くの方のお陰であります。そして、なによりも、これが最も重要なことですが、博物館のすべての活動に対して、楽器学や音楽学、それに関係するあらゆる分野の学問や芸術に関わる、日本全国の、素晴らしい方々のご協力のお陰なのです。

本日、会場にいらっしゃる皆様のお顔を拝見いたしますと、この20年のあいだに、ど

こかで、そし今も、博物館を助けてくださっている方が大勢いらっしゃいます。そのような方こそ、本当は受賞にふさわしいと思います。ですから、今回の賞は、博物館という組織が頂いたというよりも、むしろ、今まで博物館を助けてくださったすべての、民族音楽学に携わる研究者や演奏家への賞だと思います。改めて皆様に感謝申し上げ、ともに受賞を喜びたいと思います。

本日の受賞記念スピーチは、「博物館に“命”を与える試み～浜松市楽器博物館の20年～」というタイトルですが、展覧会や演奏会などの活動の一つ一つ紹介しましても、特に珍しいことではありませんから、簡単に触れることにいたしまして、活動の裏、根底に流れるコンセプトについてお話したいと思います。

まず当館の展示の特徴は3つです。

ひとつ目は「世界の楽器を偏り無く平等に展示紹介する」ということです。これは当たり前のように思われるかもしれませんが、実在するヨーロッパのほとんどの楽器博物館はそうではありません。日本の音楽大学の博物館も、大学の性格から考えてみればやはりその傾向は否めません。開館当時、世界で最も新しい楽器博物館として浜松が選んだ道は「西洋の楽器や音楽を最高とすることなく、かといって自国日本の楽器や音楽を最高とすることもなく、世界の楽器や音楽は、さまざまな異なる価値体系はあっても、文化としては平等な価値を持つ」ということです。この考えは「楽器は、その素材や形、音の出し方や音色、さらにはそこから生み出される音楽を通して、それぞれの時代と地域に生きた人々の智慧や感性を、鮮明に映し出してくれます。」という楽器博物館のシンボルメッセージに現れています。

浜松はご存知のように明治時代に足踏み式リードオルガンの製造を山葉寅楠が始めて以来、日本における西洋楽器製造の中心地で、戦後はピアノをはじめとする世界1の西洋楽器製造産業のまちとなります。もちろん日本の他の都市と同じく、人々が楽しむ音楽はピアノやオーケストラ、吹奏楽と西洋音楽が中心です。そのまちで、世界の楽器と音楽を平等に取り扱うということは、それ自体が大変な試みでありました。極端に言えば「西洋音楽との静かな戦い」といってもいいかもしれません。しかしそれは、勝敗を争うということではなく、西洋音楽がメジャーなこの世界の中に、非西洋音楽の世界を広げていくということであり、西洋音楽と非西洋音楽を、つまり世界の音楽を、バランスよく配置し紹介していくということでもあります。

2つ目の特徴は、「みる、きく、ふれる展示」です。楽器は、目に見えない音楽と違い、見に見える立体造形物です。あるものは工芸品であり、あるものは美術品でもあります。自分が演奏できなくても、音が出なくても、見るだけでも素晴らしいのです。これは、楽器を並べて展示するという方法で紹介できます。展示の仕方はいろいろな基準がありますが、当館はまず世界の5大陸と、日本、そして、浜松の特徴であるピアノを中心とした鍵

盤楽器と国産の西洋楽器、に分けました。西洋楽器は、ザックスーホルンボステルによる発音原理別、時代順としています。これでとりあえず楽器の時代による変遷はわかります。しかし、これでいったい、どのような意味があるのでしょうか？ 楽器や音楽の本質は、発音原理でしょうか？ 単純から複雑への変遷でしょうか？ そうではありません。これは単なる整理に都合のいい基準でしかないのです。

常設展は、1995年4月のオープン時はヨーロッパと日本の楽器のみの700点、96年9月にはアジア・アフリカの楽器300点を追加展示、そして2006年3月には現在のような1300点の展示となりました。オープンの際は入館者が最初に目にする楽器は、美しいヨーロッパの古楽器でした。しかし今は、日本を含むアジアの楽器たちです。多くの入館者はそれを目にした時、「うわ〜」という歓声を上げます。彼らにとってアジアの楽器との出会いは、初めてなのです。

特別展は、オープンの時の「竹の楽器・ひょうたんの楽器〜音と形への工夫〜」を皮切りに「世界の太鼓」「遊牧民の楽器」「ペルシャの楽器」「シンボルとしての楽器〜聖なる形・祈りの音〜」「楽器の科学」「歌舞伎の音楽と楽器」「楽器誕生〜日本の音の知恵と技」「ピアノ大解剖」「敦煌莫高窟壁画復元楽器」「楽器と20世紀」「大正琴の世界」「バグパイプ博覧会」「リードオルガンという文化」「埋もれた楽器たち」「ブラジル楽器紀行」「楽器というデザイン」など、地域、種類、歴史、人物等、様々なテーマを取り上げてきました。なかでも「シンボルとしての楽器」は楽器が背後に持つ精神世界を紹介したものです。また「楽器と20世紀」で展示した電子楽器がご縁で、日本の電子楽器メーカーとの関係ができ、メーカーを超えた電子楽器コーナーの開設につながります。

「目の前の展示品が器である」というからには、誰もが音を聞いてみたくになります。博物館では開館時は、ヘッドフォンで目の前の展示品の音を聞いてもらう装置を70台あまり設置しました。この聴く展示は、2006年の展示リニューアルで、モニタ付きスタンドを35台導入し、計100台以上になっています。また個人に無料で貸し出すイヤホンガイドもその時に100台導入しました。

みて、きいて、となれば次に人が望むことは、楽器をさわりたい、鳴らしたい、です。しかし、貴重なコレクションを自由に触っていただくことは文化財保護の観点から不可能です。そこで、体験コーナーを設けて、わずかですが、自由に演奏してもいい楽器をならべました。もちろん現在市販している楽器です。体験コーナーは当初は展示室の片隅の小さなスペースでしたが、2006年のリニューアルで、小学校の教室より少し大きな体験ルームとなりました。

3番目の特徴は、「展示を補足する多種多様な活動」です。これは、種類を言えば特に珍しいものではなく、どこの博物館や美術館でも事業として行われているものです。主なものは、レクチャーコンサート、民族音楽の歴史文化講座、世界の楽器の演奏入門ワークショップ、展示ガイドツアー、展示室でのミニコンサート、小学校への移動博物館などで

す。

レクチャーコンサートは今年3月末で通算167回を数えました。演奏者ではなく楽器が主役という基本姿勢、楽器と音楽にまつわる文化を解説すること、そして可能な場合は博物館のコレクションを使うというのが原則です。この映像記録は貴重な財産です。小学校での移動博物館は、単に楽器を展示することではなく、職員がいろいろと話をし、人々と音楽の関わりを紹介したり、楽器の体験をします。子供たちは西洋音楽以外の世界を知ることを身をもって体験します。

また音の紹介という意味では、「耳で聴く楽器のカタログを」作ろうと、CDやDVDを作っています。CDは1997年に2種作りましたが、その後中断し、2004年からコンセプトを変えて再開しました。新しいコンセプトは、単なる音のカタログを超えて、音楽的、芸術的、学術的にレベルが高く、一般の人が聴いても楽しめるものです。素晴らしい演奏家や研究者が協力をしてくださいました。その中のひとつは、24年度の文化庁芸術祭レコード部門の大賞をいただくことができました。

以上の活動は、項目としては特に珍しいものではありません。浜松の特徴は、これらの活動で、楽器というモノを媒体として「何=どんなコト」を伝えるかということなのです。

楽器博物館の活動指針を示す浜松市の条例には、活動の項目は書いてありますが、具体的な内容は書かれておりません。「何を」するかはすべて企画をするスタッフに任されています。よい企画ができるかどうかは、スタッフの持つ能力いかんによるというのは言うまでもないことでしょう。

博物館が何を伝えようとしてきたか、それは、ひとことで申し上げれば、楽器の持つ「宇宙観」と言えるでしょう。宗教、信仰、神、価値観、美意識、演奏の目的、作法、場所、音階、などなど観点を上げればきりがありませんが、「単なる楽器とその音楽の演奏」というレベルにとどまるのではなく、人々の暮らしや精神世界の中での楽器と音楽の姿を、一般の人々に紹介することです。なぜそのことが必要なのか、それはここにいらっしゃる皆さんには説明する必要はないでしょう。みなさんはまさにそのことの大切さを認識し、日々研究なさっているわけですから。

ただひとつ、博物館とみなさんとの立場の違いは、みなさんが置かれている世界は学問の世界であり、博物館が置かれている世界は学問の世界と、かつ、一般の人々の学習という世界であるということでしょう。博物館は、一般の人が実物を見て、解説を読んで、知識と教養を得るという世界です。そして、より深い世界に触れたり、今まで知らなかった世界を知るということです。今や日本人と切っても切れない西洋音楽でさえ、知らない世界は広大です。過去には現代と異なる楽器、響き、美意識があったという歴史的事実です。非西洋音楽の未知の界は西洋音楽の比ではないでしょう。しかし、一般に人々がその世界に触れることができる機会は、望んでいてもなかなかないのです。そのような世界を常に

提供できるのは、ビジネスや学校では難しいことですが、常に存在しオープンしている博物館なら可能であります。

私は、最初は、学芸員として活動の企画や運営、資料の整理などを担当してきましたが、2004年からは館長という立場でさらにリーダーシップを取らなければいけない立場になりました。博物館の活動は全て人がするわけで、なにも建物がするわけではありません。ですので、この「楽器の宇宙観」を伝えるためのいろいろな方法を日々模索し試行錯誤してきたというのが、この20年の偽らざる姿であります。そしてそれは、みなさんがなされた民族音楽学の研究の成果を、楽器博物館を訪れる一般の人々に、子供からおじいちゃんおばあちゃんに、専門家にもそうでない人にも、音楽が得意な人にも苦手な人にも、「わかりやすく、通訳して提供する試み」ということにほかなりません。

古い楽器や世界の珍しい楽器をただ並べるのでは、骨董屋さんの店先の陳列と変わりません。それでは宇宙館は伝わりません。展示してある楽器に命を与えて宇宙を語ってもらわないといけません。ここの楽器のもつ命はやがて博物館全体の命につながります。そうしてこそ博物館がモノの墓場ではなく、ミュージズの館となるのです。

「博物館行き」という言葉がありますが、これはモノの墓場であるということを示します。浜松の楽器博物館を楽器の墓場にしないこと、そのための試みが、この20年の試みでありました。

そうした活動とその記録の積み重ねにより、ようやく外に発信できる財産が博物館に蓄積できました。それを外に発信するというのも試みました。この2～3年は、海外との関係も生まれました。フォーリン大学の民族音楽学センターが主催する東南アジア民族音楽学会議ラオンーラオンへの招聘発表、CDの受賞がきっかけとなったクロアチアでの世界の受賞博物館が集うThe Best in Heritage会議への招聘発表、そして国際博物館会議イコムの楽器博物館専門部会シムシム年次大会への参加発表であります。この中で感じたことは、日本の音楽研究や、博物館の現場の活動は、世界に引けを取らない、いやそれどころか、世界の最先端を行っているということでありました。ただ地理や言葉の面から、世界に情報が発信されていないということを痛感しました。これは日本全体が持つ大きな課題でしょう。

最後に、このような基本姿勢を持つにいたった私自身のことをお話させていただきたいと思います。

私は昭和30年生まれですから、多感な小学校3年生の時には東京オリンピック、中学校3年生の時には万国博覧会を体験しています。大阪の豊中市に住んでいましたので、万博にはなんども足を運び、世界の文化に触れることができました。中学生の頃にはNHKFMラジオで小泉先生の「世界の民族音楽」という番組がありよく聴きました。小泉先生はテレビにもよく出ておられましたから、解説付きの演奏を目にすることができました。すば

らしい先生がいらっしゃるのだなあと、子供心に思い、いつか会ってみたいなあと思いました。

大学は京都大学の教育学部に進み、そこではユング心理学の河合隼雄先生の講義を聴くことができました。4回生の時、万博公園に民博ができました、足繁く通いました。民博創設時の先生方が大学生を対象に開催された合宿形式の夏の民族学セミナーにも参加しました。梅棹忠夫先生は、オープン記念に京大で講演されました。その時におっしゃった言葉で私の心に残っているのが、「民博や文化人類学者の仕事は、文化の翻訳です、文化の辞書をつくることです。」という言葉です。みんぱくには、楽器博物館は開館以来お世話になっています。

またそのころ、フィールズ賞受賞の数学者、広中平祐先生が文化勲章を受賞され、京大の教授にもなられました。数学の世界観や教育感のお話はとても素晴らしいものでした。大指揮者の小澤征爾さんもボストン交響楽団の音楽監督として油の乗り切った頃で、小澤さんの学生時代のヨーロッパスクーター一人旅武者修行の本や、広中先生との対談にも大いに刺激を受けました。江崎玲於奈先生もノーベル物理学賞を受賞され、よくお話をマスコミや本を通じて聴きました。

高校の時から私はリコーダーというヨーロッパの縦笛のアンサンブルを始めましたが、指導していただいたのは音楽学者の西岡信雄先生でした。西岡先生は大阪音楽大学の教官で教授となり、最後には理事長と学長を務められた方ですが、西洋音楽はもちろん、日本音楽にも民族音楽にも造詣が深く、様々なことを教えていただきました。それは西洋音楽に限定されることのない、世界の音楽の智慧や感性でした。大阪音大の楽器博物館の展示資料の世界各国の笛を使つての演奏会もいたしました。西岡先生は浜松市楽器博物館の名誉館長であります。

音楽とは違う分野ですが、大学在学中にアメリカに行き、ごく普通の公立中学校で、3か月間、現地の先生の助手をしながら、アメリカの学校教育の生徒と先生の生活を肌で感じることができました。卒業後は中学校の教師となり、さまざまな学問の知識をわかりやすく子供たちに教えることの大切さを日々考えました。またインドネシアのジャカルタ日本人学校に三年間務め、学校での職務の合間にインドネシアの島々を訪れて、音楽を聴きました。

このような様々な先生との出会い、様々な社会での出来事、さまざまな体験が、今の私の人生と仕事の根底に流れていることは疑いありませんし、生まれつき音楽が好きだというDNAを持っていますので、どんな音楽にもアレルギーがありません。これは、世界の楽器を扱う楽器博物館には好都合なことでしょう。

学問の世界では、科学技術の研究成果は、目に見える形で、人々が実際に使える形で、世の中に役立っています。自動車、電化製品、携帯電話などなど例を挙げればきりがあ

ません。一方人文科学はどうでしょうか。哲学や文学、美術、音楽についての学問はどうなのでしょう。たくさんの素晴らしい研究成果があることは事実です。民族音楽に限っても、ここにおられる皆さんを含めて、世界の研究者の研究はほんとうに素晴らしいものです。しかしそれが、世の中の、ごく普通の人々には伝わっていないのです。書物やCDがお店にならなくても、もともと関心のある人しか、それを選びません。もともと一般の人が、西洋音楽、それもいわゆるクラシック音楽と、広い意味でのポピュラー音楽以外の音楽とその文化に触れることが、とても難しい、というよりも機会や場所がないのです。子供たちが音楽を楽しみ学ぶ小学校や中学校の授業にも、現状は期待できません。解決法はあるのでしょうか。

楽器博物館は、その解決のひとつの手段として役立てると確信します。つまり、大学などでの研究者の学問の成果を、易しく噛み砕いて小学校の先生が子供たちに教え伝えるように、音楽学や民族音楽学の研究者の成果を、易しく噛み砕いて、子供からおじいちゃん、おばあちゃんまで、一般の人々に伝えるということです。そしてそれは文字や音声だけでなく、「楽器というモノ」がありますから、とても入っていきやすいのです。楽器だけでも不十分だし、文字だけでも不十分です。それらが統合されたすべてのチャンネルを駆使して、世界の音楽の素晴らしさを伝え、人の心に、異文化を理解し受容する寛容性を培うことが大切でしょう。

西洋音楽、クラシック、民族音楽、そのような区別はなく、すべての音楽とその宇宙です。作家の井上ひさしさんがおっしゃっていた、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに」伝えることが大切だと思います。それが博物館という、一般の人々へのインターフェースの役割だと思います。しかし、コンテンツは博物館のみでは作ることができません。皆様をはじめ多くの方々のご協力なくしては作れません。その多くの方を、浜松市の外に求めないといけないという悩みを持っております。

楽器博物館は、おかげさまで20周年を迎えることができました。このお目出度い年に、小泉文夫音楽賞をいただきましたことは、最高の誕生日プレゼントであり成人祝いです。浜松市も昨年12月に、ユネスコから創造都市（クリエイティブ・シティ）音楽部門の都市にアジアで初めて認定されました。その意味からも今回の受賞は、今後の責任も含めて、おおきな励ましになります。また私個人も、博物館で20年間仕事をさせていただいた記念の年でもありますし、去る4月には還暦を迎えた年でもあります。実は誕生日が小泉先生と同じ4月4日なのです。ですから個人的には還暦の素晴らしいお祝いを頂いたと思っています。

西洋音楽も含めた民族音楽の宇宙の素晴らしい世界に、人々が出会い、感動し、さらに入っていくきっかけをつくる場として、楽器博物館はこれからも活動してまいります。皆様のご協力をお願いし、記念の講演とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。